

友人に与えて性道德を論ずる書

雨村兄：

ながらく通信してませんが、実はあまりにも慣れ慣れしくなるからです。ましてお互い好事の徒ですし、一月のうち何篇か文章が新聞に載りますから、読めば世間話をしているのと変わりありません。だから別に八行の書〔手紙のこと〕に書く必要はないわけです。しかし少しばかり、『婦人雑誌』について、前からあなたに話そうとしていたことがあります。これはたぶん怠けたせいで、今まで延び延びになって筆を執らずに来たのですが、今日又想い出したので、この手紙を書いてあなたにお送りします。

わたしがもしあなたを称賛しようとして、君の『婦人雑誌』はなかなかよくやっていると言うならば、たといほんとうのことであっても後ろで喝采している嫌疑がかかりますから、それはわたしの言いたいことではありません。いまは別に少し不満に近い意見ですから、言ってもかまわないでしょう。君の恋愛至上の主張は、理解でき且つ賛同できるようではありますが、君の『婦人雑誌』はうまくやれてないように思います。——というのはこういう雑誌はあのような思想を載せるものではないからです。『婦人雑誌』はわたしは知っていますが営業的性質のもので、営業と思想——しかも又恋愛と来ている、どれだけかけ離れていることか。われわれが思想を語ろうとするなら、四五人が自費でもとを取らないで発表するならよろしいが、営業的性質の刊行物で、ましてや又 The LADY'S Journal と来ては……それはどの号だってよくないと思います。われわれは、営業と真理、職務と主張はいずれも断乎として混同してはならないことを知らねばなりません。ところがあなたはくそまじめに“他人の酒杯を借りて自分の不満を澆ぎ流そう”としたのです。忠実な婦人問題の研究者たるに恥じませんが、優れた編集者とはいいいかねます。だからわたしはいまあなたにちょっと忠告しようと思います。どうかそういう“過激な”“不道德な”両性倫理の主張は自分の刊行物に載せる準備をし、別に改めて営業精神に則って公の雑誌をやり、決してもう LADIES and gentlemen が喜ばない恋愛は語ってはいけません。最もよいのはせいぜいカステラ・プディング・杏仁茶などの類の作り方、それに刺繍・裁縫・髪型・ブラジャーの秘訣を載せ——あるいは纏足法を調査して後日の需要に備えてしかるべき時に掲載すれば特によいと思います。『白話叢書』の中の『女誠注釈』は、いまでも採用転録してよいし、将来読経の潮流が北から南に行った時には自ずとあらためて『女兒経』を載せるべきです。そういう時代が来るのはきっとそう遅いことではありません。未だ雨ふらざるに綯繆す〔大雨の前にそれへの備えをする〕、いまは正にその時です、間違っただけではありません。こうした雑誌を青年男女が愛読するかどうかは敢えて予言しませんが、きっと権威ある旦那方の気に入って、何冊も買って孫娘たちに読ませるでしょうから、販路が狭いと心配するには及びません。たとい販路のことは言わないとしても、聖賢と大衆にくっついてさえいればまちがいがおこるはずはありません。たとい世道人心に功績があつて褒章にあずかるとは言えないにしても。要するにわたしはあなたが境界をはっきりさせ、気力はひとに売り、思考は自分に取っておくことを希望します。これは世間に酬いる取っておきの妙計です。もし応用できるなら、災いは消え福来たり、効験は『波羅蜜

多心呪』のように顕かでしょう。

しかしながらわたしはやはりあなたがあまりに熱心にあなたの主張を発揮することに賛成できません。たとい自前の刊行物であっても。わたしは実際嘆かわしいのですが、“熱狂”に欠けた人間です。わたしの言論には多少ともみな遊戯の態度があります。わたしもちょっと過激な思想をいじくるのは好きで、草を抜いて蛇を尋すように道学者に言いがかりをつけたりしますが、しかしフランスのラブレーのようにただ“あやうく火炙りになる”までで、殉道の決心があるとは限りません。まるで子どもの蹴まりのようなもので、とても愉快な事とは思いますが、本もと何かを蹴り出そうなどと期待してませんから、蹴り厭きたらお終いで、そのまま脚を折るほど蹴るつもりはありません、——脚を折るほど蹴ったところで残るのはまり一つじゃありませんか。われわれが両性倫理についての意見を発表しても自分が言いたいからというに過ぎません。まさか最近のあるいは最遠の将来に何か効力を発揮することができるかと期待しているわけじゃないでしょう。イエス・孔丘・釈迦・ソクラテスの言葉は、いったい世間にどれだけの影響があったのか、わたしには確かなことは言えませんが、その結果は恐らく自分がそう言って満足だったというに過ぎないでしょう。後人が読んで満足したり——あるいは満足しなかったり、ただそれだけのことです。わたしは絶対に進歩の説を信じないのではありません。だが急速にしてかつ完全に進歩できるとは信じません。世界がどんな様子に変わろうと、鬭争・殺傷・私通・離婚といった事は要するに後を絶つことはないと思います。われわれの高遠な理想郷は結局われわれの心中の独自の楽しみ影にすぎません。そうした理想のために、わたしも力を出したいですが、だがいまはまだ命をかけようとは思いません。わたしはいまだ志士のように犠牲を高唱し、最後まで奮闘せよと勧めようと思ったことはありませんが、ほんとうを言うと志士でないことを慚愧し、自分のできないことをひとに勧めるのは具合が悪いですから、わたしがあなたに勧められるのはただあまり熱心になって、道学者たちに火炙りにされるようなことになるなということだけです。最もよいのは白炉子*を眺めながら用心していることで、しばらくは近よってはいけません。もちろん改めて白炉子党に入るなどは駄目です、——白炉子の煙が少し薄くなった時には相変わらず自分の仕事を続け、決して決して一気に、翠鳥印のタバコのように“炙”られてはなりません。わたしも自分から頭の皮を差し出して、真直ぐ白炉子の口にもぐりこもうという人があることは知っています。あるいはそれをひっくりかえすこともできるかもしれません。でも、わたしは重ねて言います。自分はまだ懸命にはならない、太子椅子に坐ってむやみにわめくのは具合が悪いので、この点はどうか勘弁願わなければなりません。

先週の土曜日の晩にここまで書いたのですが、夜中にわたしたちの下の娘が突然急病にかかって、まるまる三日慌てました。いまは医者が危険は去ったと声明しましたが、まだ十分慎重に看護する必要があります。だからわたしもまだ執筆の時間がないのです。だがこの手紙はどうしても出さなければなりませんから、締めくくりの一句がなくてはならないません。要するに、わたしは中国では時期尚早の性道徳論をやらないように勧めます。理由は上に述べた通りです。青年や黄年の誤解あるいは利用はすべて問題になりません。この点については述べている暇がありませんので、ただ陳仲甫先生が一九二一年にされた話(『新青年』隋感録一一七)を一部分後に

抄録します。

青年の誤解

“教える者がもし酔っぱらいを扶けるなら、東を助けたと思ったら西が倒れる。”現代の青年の誤解も、酔っぱらいと同じだ。……婚姻は自由でなければならぬと言うと、彼はもっぱらラヴ・レターを書いて異性のだちを探すことを日常の重要な勉強だとする。……家庭の圧制から離脱せねばと言うと、彼は年老いて寄る辺のない母を棄てる。社会主義共産主義を提唱すると、彼は敢然としてみんなや友人は彼を養うべきだと考える。青年は自尊の精神を持たねばならぬと言うと、彼は目に一切なく、妄りに尊大になり、善言を受け入れない。……

ごらんなさい、これには、放っておくより他にどんな手がありますか。でなければたといカステラの作り方だけ話しても、おそらく彼等はやはり誤解して、カステラを食べると胃病になると言うでしょう。草々にて多く書けません。日を改めてまたにしましょう。

民国十四年四月十七日、署名。

※初出：1925年5月11日『語絲』第26期

*白炉子 白い土製のコンロだが、ここは白色に意味があって、右翼の道学者たちの勢力を言うのであろうか。